WASON
HQ
1104
J747
Jun. 2
1888
No. 112

廿一年六月(版權所有)二日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府内無税 郵税一錢 毎土曜出版

第百貳拾號

社説
男女交際論(第一)
當今の男女交際
論説
矯風の方法(小崎弘道)○家内經濟の大要(木村熊二)
批評
明治之細君○家政讀本
叢話
フイヅヲルスの兄妹○宮もわらやも○子供の教育(デホレスト夫人)○沙翁戯作女學ものがたり○小女の一言國政を改む○指環考(久松定弘)○百人一首(鈴木弘恭)慕べき妻
小説
小説神髓
佳傳
女流の畸人(石橋忍月)
寄書
いらつめの批評の評
小供談
新報

専賣二〇三、一一、一一五 許和堂中川昇刻

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 112, JUNE 2TH, 1888.

EDITORIAL:— On Social Intercourse : No. I., Modern Social Intercourse.

LEADING ARTICLES:— Means of Social Reform, by Rev. K. Ko-aki ; Principles of Houshold Economy : No. V., by Rev. K. Kimura.

CRITICAL NOTES:— "Meiji no Saikun" (The Matron of Meiji); "Kasei Doku-Hon" (A Book on Houshold Economy).

MISCELLANIES:— Wordsworth and His Sister ; Neither Palace nor Hut; Children's Training, by Mrs. Deforest : A Wise Girl ; "Jogaku" Drama by a Shakespeare ; Finger Rings(IV), by Dr. S. Hisamatsu ; Short Conversation on the Hundred Odes by a Hundred Poets (IX).

NOVELS:— Bouquet of Novels.

BIOGRAPHIES:— Some Famous Ladies in Olden, Japan.

CHILDREN'S COLUMN.
CORRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.

材料新誌の廣告

演說と著作との材料を集めたる書類眞に多き中に吾人は確信す其尤も精密にして且つ其の種の尤も手廣ろきは必らず**材料新誌**に超ゆるものなかるべし之は讀者が先づ一讀の上へ其の實否を知られんとを欲し見本一部を需めらるゝ者は郵券五錢にて宜し都合九册迄で出來し一册紙數三十頁以上定價十錢也故に先づ見本一部購讀の上御注文あらんとを乞ふ而して見本には九册の中何號にても申越次第發送すべし

右發賣の事務を擔當する

女學雜誌社

● 珊瑚の珠　（第六十七回）

○流水の腐らざるは其の逝くが故あり戶樞の蠹まざるは其の運るが故あり（子華子）

○欲多ければ則ち心散じ心散ずれば則ち志衰へ志衰ふれば則ち思ひ遠からず（鬼谷子）

○智慧ありと雖ども勢に乘ずるに如かず磁器ありと雖ども時を待つに如かず（孟子）

○好き儀範は舌なくして能く勢力あるの敎師あり（スマイルス）

○多くの事を倣すの捷法は他なし即時に一事を爲す也（シスロ）

○少年の高きを仰がざるものは必らず卑きに俯す精神意氣の天に冲飛せざるものは必ず地に匍匐す（チズタエリー）

○節儉の要道は小々の利に意を注がんよりは小々の費を省くに若かず（ベーコン）

○時日と忍耐とは桑の葉をして紬殺に變ぜしむ（西洋の諺）

○筆と劒と彼此を殺すにあらざれば此彼を殺す（ビクトルユゴ）

○おろかにして愼しめるは得の本なり巧みにして恣ひまゝなるは失の本なり（兼好法師）

○女學子曰く金言は之を聞く可らず先づ之を行ふべし金言は糖丸の如し嚙んで而して其味を知る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第百拾貳號 明治二十一年六月二日發兌

社説

○男女交際論

（第一）、當今の男女交際。

男女交際の有樣に就て、吾人其古今に相違する所ろを考うるに、眞に驚ろくべき莫大の差別あるを認たむ」昔しは男女七才にして席を異にせよと敎へたり、然るに今は、男女二十にして尙ほ相抱着いて踏舞するを通なりと許せり。昔しは兄の嫁が水に溺るゝ時でも、之を救ふに自身の手を以てすべきや否やと疑問したり、然るに今は、男女相ひ手を携ふるを特の外に興あることとし、他人の細君なりとも之に腕を與へて同伴せざれば、文明紳士の責任に於て相濟まざる所ろあるやに申す。左れば、昔しは正月の歌ガルタと、盆の假粧チドリの外は、孃君の顔を見たることなき少年子弟も、今は學校の上り下り、日々の讀書遊步、を共にし。昔しは花見、墓參、及びたま〳〵の芝居見の外は、決して門外に出たることなき箱入娘も、今は交際會の幹事と爲て、附合方眞に巧妙なりとの評判を受る迄に至りぬ。男女交際の有樣、古今に於て著るしき相違を來したるものと云ふべし」吾人を以て之を喩しめば、恰かも是れ、籠鳥が其籠より出でゝ、自由に樹枝の間だ間だに囀づるが如く、亦殺風景を極めたる冬天の雪の跡に、今まや馥郁として芳香を發する最と愛らしき花の咲き出んとするに似たり。眞に賴母しき世の有樣に成行たりと云ふべき也。

昔し孔父の妻出でゝ道を行く、宋督之を見て心頗ぶる動く、目すなはち之を逆へて、目亦た遙かに之を送る、茫然自失、情思戀々として禁ず可らず、遂に計を運らして之を奪はんと欲し、爲めに兵を起して國家を亂るに至る。春秋は嚴正の筆を以て之を罰し、左氏は老實の筆を以て之を傳ふ、君子は云く、之必ずしも、宋督の惡しきにはあらず、抑も婦女子は外に出づ可らざるもの也、而して外に出でゝ人に掛想せられ、掛想せられて而して亂階茲に生ず。故に其罪、實に妻を外に出すものと、及び其出でたるものとに在り、掛想し戀々し國家を亂るものゝ如きは、未だ必らずしも大に責むべきにあらずと」凡そ斯樣ある評論の行はるゝ時代を以て、試みに當今の明治時代に比較せよ。八字鬚は唇の上に在り、黑塗車は其後へに在り、紳士揚々として夫人の御手を要し、馬の如く反返り、鷹の如く見張り、須らく吾が細君を見よと云はぬ計りに、大道

を狹しとしてブラリ〳〵逍遙せらる。人之を見て則はち評して云く、アノ夫婦は眞に樂しき哉、琴瑟和樂して君子の好逑を得たるが如しと。路人は之を賞め、友人は之を羨やみ、吾も亦た早々に之に倣はんとまで發心するに至る」蓋し是れ、評論の標準、天地も尙ほ及ばざるほどに一變したるが故也。左れば、神聖なる細君も、今は每度外に出歩るくことあり。謹愼なる男子も、今はたび〳〵閨門內に案內せらるゝことあり。二八可憐の孃は容姿楚々として、活潑少年の輩がらは居作優く々として、今や恰かも松樹の下に薔薇の咲亂れたるが如くに、共に雜居することもあるなり」之を以て、上みは鹿鳴館の舞踏會より、下もは何々交際會の男女入れまじりに至るまで、今まは尤も自由に尤も無頓着に尤も亂暴狼藉に、男女交際の制限を撤去するに至りたり。之れ果して全く喜ぶべきか否や、女學子大に迷惑する所ろのものなきにあらず。

然れども此の所に於て一箇の大に注意すべき問題あり。即はち右に云ふ所ろの男女交際の盛況なるものは、現に今ま何程の區域に迄で行はれ居るやと云ふこと是れ也」成程、昔し春秋論語等に於て甚はだ嚴重に申渡じたる如き制限法は、今まに於て殆んど全く其効力を失ひたるが如し。然れども彼の踏舞、彼の交際會ある者も亦た、其の實際に行はるゝの區域は、眞に尙ほ甚た狹まきにはあらずや。而して其の甚はだ狹き區域に行はるゝの間だに於てだも、現に未だ餘り世人の贊成を得ざるの恨みあるにはあらずや。之れ抑も何の故による乎」蓋し鹿鳴館の踏舞は、一時隨分に盛大なりき、其の勢力の及ぶ所ろは、貴婦人紳士を驅つて、悉く其の衣服を洋裝に進化せしめたりき、然れども尙ほ之にては面白からずとて、或は汐汲の海士となり、或は常盤御前となり、或は五郎十郎と成る迄でに浮立たせたる處ろ、此の一時の火の手は、何の間にやら段々と下火に成り行き、今日此頃に至ては、折節に、彼の踏舞回復の大ざらひあることを承はるの外、舞樂會員何んどなく引立たず、踏舞の熱悲しくも三十二度以下ゑ下落したるは、抑も何の故ぞや」又彼の男女混合の交際會なるものを見るに、成程其の會の多きことは眞に莫大にして、其會名の立派なる會の御主意の行屆たる、實以て敬服の外なきにも關らず、此等の諸會に臨席せらるゝの諸君は、恰かも是流行り役者が、東西南北に掛持して其藝を見世振るが如く、何處に參り見ても大抵は同じ顏なり。即ち所々の交際會に出席せらるゝ所ろの會員は大抵同人物にして、此等の同人物を除けば餘は是れ

僅々たる雜兵なり。即はち言を換ゆれば其の會員になるもの實際に甚はだ少しと云ふは、何の故ぞ。但しこれ等の交際會と云へども、少くとも其發會の砌りには、及び其最初の間だには、隨分に多くの來會者も之れ有りしやに聞ゆ、而して其會の舊くなると共に、其の會合の度重なると共に、會員の數追々に減じ來つて、遂に當今の如き捗々しからざるの景況と爲れりと云ふ。然らば則ち、之れ尤も其の所以を問ひたく欲する所ろの要點にあらずや。

世人往々誤まり報じて云く、女學雜誌は齊東野人の巣窟にして、踏舞交際の如き開化めきたる事柄には一切反對なり。即はち涙を垂るゝことと重くるしき小言を言ふことの外は、凡そ如此き活潑々の世情には殆んど野暮を極むと云はる。之は吾人が毎度耳にする所ろにして、現に如此き冷語を寄せられたるの人も亦た尠らず。然れども、吾人は敢て野暮不通を以て自任するものゝみならずして、若し齊東野人と云はるゝ時は、幾分か慷慨悲憤する丈けの英氣は之れ無きにあらざる也。

成程吾々同志者の多くは、未だ曾て日本人と共に踏舞したることなく、又未だ曾て日本の男女交際會に臨みたることなき人物也。然りと云へども固より、踏舞彼自身、男女交際會彼自身の上に不同意なるものにあらずして、反つて、男女の交際なるものを其根底よりして大に主張する所ろのものなり」故に若し、正當の順序に隨つて發達し、且つ正當の規律に由て取締られたる、踏舞會交際會ならば、吾人は實に其の今日に莫かる可らざるを信じ、其の益々大に發達せんことを懇願し、且つ之が爲に相應の盡力を爲さんと欲する所ろのもの也」左ればば如此くにして、踏舞會交際會等が今日迄に至れるの經歷を顧み、其の現に當節の如くに衰ろへたるの理由を考へて、或は眞理の蔽ふ可らざるを見て嚴然として之を祝し、或は眞理の將に蔽はれんとするを見て憮然として之を歎じ、少さか男女交際に關するの卑見を開陳するは、實に當今に必要の事なりと覺悟したり。

論説

○矯風の事業　小崎弘道述　社員筆記

左は客月西部婦人矯風會に於て小崎君の演述せられたるを社員が筆記せしもの也。

今日は婦人矯風會のお方々の御集りになるに就て私に何かお話しをせよとの御依賴でありますが私も全躰矯風會のことに就

ては是れまで段々伺て存じて居ますが此會に於てお話しをするとハ今日が始めてですからどんなお話しをすれば皆さんの御滿足になるか又如何なるとが能く當て嵌つて居るか其邊は少し不案内でありますから或ハ話しの前後するかも知れません其邊は御承知を願ひます。

彼の亞米利加で名高い婦人禁酒會ハ恰度千八百七十三年の頃に立まして其目的としました言葉があります其言葉ハ神及び家族并に國と云ふとでありますシテ此婦人禁酒會なるものハ神の爲め又家族の爲め及ひ國の爲めに爲すものである又何んの事業を爲すに於ても神の爲め又家族の爲め及ひ國の爲めにすると云ふより高尚なると又有益なる事業は御座いません惟ふに今日此矯風會なるものも其目的とする所は矢張り之れに過ぎざるものであつて即ち神の爲め家族の爲め國の爲めを以て目的とする所であらうと思ひます然かしながら其目的は同一なるも其目的を遂ぐるまでの方法手段なるものが邦々又時々に依て違ひます故に其風俗を矯正せんとする所の事柄も同く時々と邦々とに依て違ふもので御座います譬へば彼の亞米利加の如く今日よりして凡三、四十年以前のとを考ふれば彼の國で一の大なる弊風は即ち奴隷賣買の一件で御座いまして千八百六十二年即ち南北戰爭の起ります前であります其頃は彼の一國中の人々は此弊風を矯正せん爲めに大に盡力して或ハ演説に或ハ新聞に其他種々樣々に其手段を廻らしました然るに此弊習ハ多くの人の利害に關係するとで從て其說も容易に行はれんので遂に亞米利加に於て數百萬人の血を流す樣な一大事が起りまして爲めに其目的を達するとが出來ました其れより後亞米利加に於て第二の弊害なるものハ何にかならば飲酒のとであります然るに人々も之れが爲めに風俗を紊し之れが爲めに國の基ひを壞はさんと云ふとを大に恐れて種々樣々の會を起し事業を爲しますが开が中にも婦人の禁酒會なるものが最も勢力を占めて居ります今亞米利加の學者が其弊習の段々進んで來たとを調べました統計を見ますれば千八百六十年より千八百七十年此十ヶ年間人口の增殖は百分の二十二で二割二分の割合であります又此十ヶ年間酒を飲む者即ち酒を費すとの殖へ方に於てハ恰度四割四分で人口の增殖より一倍增して居ります又千八百七十年より千八百八十年の十ヶ年間に於て酒を飲む者の增したとは實に甚だしひとであります人口ハ三割二分の增殖でありますが之ゝ反して酒の年々費へる割合ハ七割三分でありまして人口の增殖より倍より尙ほ多

く増して居ります然るに其後八ヶ年間の統計を見れば葡萄酒ハ一割二分の殖へ方で之れが至て少ない恰度人口の増殖と同一であります其他強き「アルコール」を含有する酒を飲む者は八ヶ年間に五割程増して居りまして即ち人口の増殖より四倍程多く増して居ります此中最も多く増して居るものは麥酒で之れは八ヶ年間四倍増加して居ります其れ故に御承知の通り亞米利加に於てハ酒の爲めに先づ第一貧富の懸隔益々甚しく成て酒を飲む爲めに益々貧困に陷て仕舞いまして爲めに産を失ふ者ハ年々増殖します故ゑ酒を飲む爲めゑ一家族は壞はれて仕舞うと云て宜ひ且つ爲めに益々罪人を増殖して一家も之れが爲めに離散し一國も之れが爲めに亡ぶる境遇に陷ります之れは啻に一の亞米利加のみ増殖するのでありません英吉利迚も然うであります又今年ハ亞米利加大統領の改撰期で御座いますが禁酒論を翼くる者を大統領に撰擧する者も澤山あると考へます又今日亞米利加に於て飲酒を禁じて居る黨が六ツ御座いますが其黨派も段々増殖する勢ひであります惟ふに今日亞米利加に於て禁酒論の盛んなるとハ恰度今より三十年餘り以前に於て彼の奴隷廢止論の國中に八釜敷て爲めに戰爭を起したる時も同一般なる情態でありまして今日酒を飲む者は力を極めて禁酒論に反對し又禁酒論者ハ力を極めて之を抗擊して禁酒論ハ一國の大問題と爲つて居ます勢であります。

翻て今我日本國の情態を觀察するに今日我日本國に於ては何を以て最も悪しき弊習となすか又我宗教を紊し我一家を壞はし又一國を潰ぶさんとする所のものは如何なるものとならば其原因たる種々ありますが先づ酒が其一であります此酒の社會に害毒を流すとを我日本に於て考ふれば中等以上の人々ハ其害を蒙るとの少ないか知れませんが下等社會に於ては酒の害を蒙て居るとは彼の亞米利加或ハ歐羅巴諸洲よりも尙ほ甚しいものでありまして今貧乏人社會の情態を能く知らるゝ人ハ分りませうが今日我日本に於て彼の職人なる者等ハ其日儲けました金は必ず其日費つて仕舞て更に一錢をも貯へ無いものは何にが原とかならば即ち酒であります私が嘗て南鍛治町に下宿して居ましたとがありますが其裏らにハ至て貧乏人が幾人も住んで居ましたが雨抔の降りまして仕事の無いときは一家族擧て喰べる物が無くて大に困て居ります或ハ一錢二錢の金を出して薩摩芋を買て喰べて居りまして又内に在る物を質に入れて僅かの金を得然うして一錢か二錢の米を買て粥を啜て居る情態であります然るに或る時は一日に五十錢も儲け

ました時は非常に酒を飲む其儲けない時は前の樣に飲まずに食はずに困て居ります然るに其者等に遇てお前達ちはもう少し風を改めて五十錢の金を儲けた時は半分飲んで半分溜めて置く樣にしたなら大雨の降る日迚も困るとがあるまいと云て話しをすれば皆反對して其れはあなたがたが私等を知らんからである私等は毎日苦仕事をするから金を儲けた時に飲んだり喰ッたりすると云て更に用ひません其れ故に酒の害を爲すとはどれ程なるか分らん之れは生活上のお話しでありますが然う云ふ下等社會の情態でありますから道德抔は勿論少しも分らん又然う云ふ家から產れて來る子供は如何にと云ふに多く愚鈍な者であります然う云ふ人が段々多く爲て來るならば迚ても國の維持は出來ません又私等が今日我日本の社會を看て何にが又惡しき弊風かならば夫婦間の關係でありまして今我日本の家族の有樣は支那の敎へより成立て居りますからして夫婦の間は大に差異あるもので亭主が亭主であッて其他の者は皆使ひ者の情態と爲て居ります故に其れから推して看れば夫婦間の關係は能く分るとで一夫にして妾を持ち或は遊び杯をするとは一般人々の行て居るとでありまして其一般行て居るに他の人は更に之を咎めざる樣な情態であります然るに近頃に至ては幾分か人々が目を醒まして來る樣に爲りました此間も加藤弘之さんが東洋學藝雜誌上に於て述べらるゝ所を見るに我日本人は歐羅巴の風俗を倣て歐羅巴と對等の交際を望むけれ共我日本人の男女の道德に於ては更に注意せずして恰も禽獸に類する行ひを爲して居る故に迚も歐羅巴には及ばんと述べられてあります斯く人々も聊か之に注意する樣に爲りましたから此弊風を矯正するとは此矯風會に於て今日最も力を盡さるゝに好時機と思はれます。

大凡そ何事に拘はらず改革改良を圖るに就ては第一輿論の力に據らんければならん此輿論なるものが後と押しをなさん時に於ては如何なる英雄人が出ても其改良を施すとは出來ません西洋にては輿論の力は實に强いものである何ぜならば輿論の原と爲る所の敎へ即ち宗敎と云ふものがあるからであります故に亞米利加で今より三四十年以前に奴隸賣買を廢止する前に然う云ふ議論の行はれましたものは何んかならば即ち宗敎と云ふ一の原本があつてこれを踐み壇として輿論を惹起すから如何なるものでも之に敵對するとは出來ません故に今日此矯風會にても次第に力の强く爲て其論の世に行れて來るものは即ち輿論の力に據るからであります又輿論の本とは宗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

敎である其宗敎の本が後押しをするから何事にても出來ます然るに悲哉我日本國に於ては未だ輿論の本が乏ひからして從て輿論の勢力も少ない其處で禁酒のとも輿論の勢力が少ない又輿論と爲る所の根本が未だ充分我日本に這入て居らん故彼の歐羅巴或は亞米利加杯とは自から働き方が違うもので至て困難であります又其仕方に於て違はんければならんと思はれます又一夫一婦のとに就ても之れは禁酒の事柄よりも尙ほ能く人々が少し考へのある者は直ぐ分るとで之れは必らずしも宗敎に據らんでも一夫一婦に據んければならんと云ふとを知て居りますから今之を輿論に訴へても早く出來易ひとである又之は矯風會の今日我日本國の爲に最も力を盡す時又力を盡すとの出來易ひ秋と考へます其處で矯風會に於て之を改むる所の方法即ち順序を如何にして其目的を段々進めて往くかとう云ふ風に爲して本會の大切なる目的を達するかと云ふ其方法手段を設けらるゝとが今日の場合に於て實に大切なる問題であります(未完)

○家內經濟の大要(廿五)　木村熊二

割烹の事は其の巧拙により費用を減少して美味を食卓に具る事を得べければ夫を委しく陳述せんと思ひしに近頃學士太田稻造君の考案もあれば余はこゝに說き起すとを必要と考へざるあり今や一歩進んで經濟上に必要と見做したる事を說かんと欲するなり人世の幸福は負債なくして平素賴む所の恒產あればなりと古人も常に言ひしとになん南陽の隴畆に八百株の桑樹を植付け數頃の薄田を耕せば子孫の衣食も餘饒ありとて孔明は社會の事務に從事し僮僕は懽迎し稚子は門に候ち三逕は荒蕪るから松の綠に菊の花千代の榮をあらはして人の情を慰る　田園もあればこそ五斗米の爲に腰を折りて彭澤の令にはあらじと陶潛も冠を掛けたり故に恒產ある人は進んでは社會に事業をなし退ては幸福なる家を造りて生涯を安寧に過すとを得るものなり恒產とは土地勞力資本をいふ土地を耕して其の產物を得或は之に家屋を搆造し人に借して其の利益を得或は公債證書諸會社の株劵等より生ずるの利益配當を得或は手足心意を勞して金錢を得るの類此なり中等社會は大槪學校の敎員醫師代言人著作者官吏となり月々俸給を得て生計を營むものなれは之を勞力社會の人と言ふべきこの勞力社會の人にして土地を有し株劵を得んと欲せば先つ其の得る所ろの金を漫りに用ひず將來の生產を助けんとする資本を作るにあり假令は月々百金の俸給を得る人なれば其の人の生計の度

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を五十金と定め自他の五十金ハ銀行あるいハ他の方法にて之れを貯へ置きて夫れをして利益を生せしむへきなり余嘗て圓朝か鹽原多助の一代記を譚ずるを聞くに多助は昔日本庄邊にて有名なる富商なりとかや其の始は木炭を賣る行商なりしが日々得たる金は家に貯へ置くとを欲せず働く〳〵とて尻を叩て家より逐ひ出したり左れば其の金は種々の資本となりて主人の爲めに働きたりと如斯百金の月俸の半は銀行或は諸會社に入りて働き他日は資本となりて家内を扶助せんとす又他の五十金は現在の資本と成りて飲食を調へ家内の人々勞働に堪る様に身躰に健康を與へ兒女敎育の費と成りて其の智識を開發せしめ奴婢の給料となりて家内の百事を整頓するに便ならしめ或は主人圖書費と爲り交際費となりて其の勤勞を保佐んとす兎角人には物を買たき狂病ありて現今不用の物も他日何かの用に立つとて購求め之を筐底に置き架上に列べて娯む人あり試に一家中を點撿すれば無用なる衣類什物無益なる食物あれど何れも多少の金錢を浪費して得たるものなり家内經濟には其の無用なるものには金錢を費やすを欲せす有用なる物のみを購求むるとを勉むへきなりこゝに朱泥の茶碗と古き萬古燒の急須あり朱泥の價は壹圓五拾錢にして萬古燒は壹圓なれば今五拾錢を加へて朱泥を購たけれど先つ萬古にて忍耐し餘の五十錢にて支那の茶碗を求むれは風致も左程減却せすして其の用を爲すの點に至りて亦異なるとなし然して茶碗の財産を增加すへきなり又壹圓の鐵瓶と三十錢の銅の湯沸あり何れを購わんといふに鐵瓶を買ふへし七十錢の差はあれと銅の湯沸は毒ありて人身を害すると甚たし勞力を生產とする人健康を損すれは之か爲に時間と金錢を失ひ藥餌の價を浪費せさるを得す唐物屋にて二十錢の沓足袋を買んよりは同し價にてヤレを求め閑談の際に之を編めば無益の時間を消遣せすして久しきに堪ゆる沓足袋を二十錢にて得へきなり五月雨もいつしか晴れて四方山の樹々の緑に影凉し銀坐まで買物に行かんとて家を出で行々數歩して街頭に待詫たる車夫は聲をかくれば直に雇たき心起れり左れと勉て歩行を試むれは身躰に益を得て車賃を失ふとなく又之を貯へて他日雨天の日他出せん爲め用に備れば兩度の車賃を拂ふへきを一度にて用を辨ぜしむへし余嘗て之を聽く有名なる富豪河村瑞軒は貧賤より起りて一朝萬金の富を致したりしが一日庖厨に入りて竈下に殘火あるを見て急に水を以て之を消し木炭と爲し之を貯へしめたれば老婢は之を嗤て主公は家に萬金を累ね而して此の鎖々たる事

を爲すと瑞軒顧て吾は無益の財を費さす我の以て爾曹と異なる所以なりといへり又た一の富豪あり家人常に紙屑を庭中に捨るを見て一日下婢に命じて之を拾しめ紙屑を賣りたる價は爾に取すべしといへは下婢は喜んで之を拾ひ竹籠に滿るを待つて行商に之を與へ立ろに數錢を得たれは其後は庭除と椽の下へ紙片の撒するものなかりき夫竈下の殘紅椽底の片紙は元より惜むに足らすといへとも意を用ゆる周到如此にして始めて財産を增殖すべきなり。

日々入用なる物品を買ふには直に之を拂はず月末に至りて會計を爲すとの習慣は一時便利の樣なれど經濟上には不利益を生ずるなり物品を商人より借るも金錢を借るも其の負債となるは少しも異なることなし人より金を借る時のみ利子を拂ふ樣に考るは大なる誤謬なり苟も五圓の品物を借るには其に應したる利子を拂さるを得ざるあり一圓の米を貸らんには必す多少の利を付して商人より得るものなり故に薪炭鹽米の如き日々入用の品とても煩勞を顧みず一々之を拂ひ日々の會計を明に帳簿に記して先月と今月と冗費を比較して入金と浪費との平均を失ぬ樣に注意すべきなり。(未完)

"Gleams like the flushing of a shield, the earth and Common face of nature spake to him remembered things."
Wordsworth.

批評

(70)．明治之細君　中本一册(百八十六頁)定價八十錢　發兌所東京本郷元富士町盛春堂

此書は鐵筆將軍大矢森之助氏の新作に係る小說なり此度出版されたるは其の第一卷にて水野の細君は恐らく是れ當小說の主人公、新舊の女道を汲分け、美術と家內經濟と、權理と貞節とを、甚はだ等分に調合し得たる立派の細君にて。大島の細君は所云る生ぎゝの開化婦人、洋服と、女權擴張と、亭主を何人とも思はぬ一種誤解的の文明細君なり。又之に隨ふ、山本おスミは純然たる女大學のお弟子にして、くよ〳〵の心配にソックリ其上の敎育を示す、即はち昔し風のお人好き細君なり。花下お艶とは、昔し子褄を取つたる京都の知れもの、學問は全くあくして、耳に西洋の開化を聽かぢり、嫌に女權擴張者に贊成する、早製造の開らけものなり。此外、始終水とお近附なる厠婦と云ふ、流るゝ如き快辨を揮ひたる、二人の下女。一人の車引き。本屋を驅まわつて「明治之細君」を買に行きたる書生一人、凡そ此等の外は頓と男性を見ず、全卷恰かも是れ女軍の討論會の如し。

之を小說としては兎も角、何分思ひ切つたる文章に、奇拔の思想を現はし・隨分に面白き所ろあり。但しイラッメに因緣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ある人ありや、甚だ精細を寫す所ろの文句には、毎度イラツメの小説に見たる思想を利用せられたるあり。然れども之を一種創躰の、無頓着に書流されたる、鐵筆將軍の新著としては其價少なきに非ず。
吾人不幸にして未だ將軍に拜謁せず、然し將軍は餘程面白き御方にて、特に餘程自尊の御方と見へ、右「明治之細君」の開卷第一葉には、御自身の寫眞と思はるゝ、二十左右の美少年の御面相を現はし、終卷の末葉には左の如き廣告文を載せられたり、

附錄

余未だ細君なし適好の者あれば之を娶らんとす此書を讀むの貴婦人にして若し意ある者は申込あれ但し左の資格を要す　一、年齡二十歲前后。一、丈四尺三寸以上。一、遺傳病なき者。一、相應の敎育ある者。一、酒と烟草とを呑まざる者。一、財產は多少を問はず。一、容姿は美醜を論せず（然れども可成美を尙ぶ）。

鐵筆將軍　大矢森之助

(71). 家政讀本　大本三册（合百四十葉）定價　發兌所東京本町三丁目金港堂

此書は林吾一氏の著作にして、上中下三卷あり上卷には總論、住居家具、空氣、遊、掃除、衣服裁縫、洗濯の七章あり。中卷には、食物總論、動物質の食物、植物質の食物、製造食品、料理法、飮料の六章あり。下卷には、衞生上の注意、疾病、病室看護、貨幣及び其用の四章あり」文章少し六かしく、箇條尙ほ足らざる所ろあれども、當今此類の書之れなき折柄、眞に有益なる新著と云ふべし。

叢話

○チイツチルスの兄妹

英國の詩人にして、其尤も拔群ある、蓋しチイツチルスに超ゆるはあらじ。心なき山も之が爲に笑ひ、無情の草木も之が爲に動き、日暮夕陽の天、野鳥一聲鳴き渡つては、之が爲めに極大の哲理を現じ、又た人情の變遷道念の起伏なんど、こと〴〵く之が爲に隱微の奧を示す。凡そ如此きもの一と度びチイツチルスの目に觸るれば、乍ちにして活動し、乍ちにして躍立し、則ち其の口頭、沈々として之を吟じ出す。吾人今に於て其吟を朗誦するに、神魂飄然として高く、情思轉た丶切なるに堪へず。嗚呼チイツチルスは詩人の聖なるもの哉。
然るに詩聖チイツチルスの高吟を誦するものは、先づ之と共に其の愛妹ドロセアの友愛を謝せざる可らず。蓋し、チイツ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ヲルス、既でにカムブリッヂの大學を卒業して、吾れ之れより何如んせんと問ふとき、其の剛邁なる氣膽遂に之を驅て、當時革命氣運の將に破裂せんとする、佛國に漫遊せしむ。然るに、王政快ろよく倒ほれて、又た暫らくしてロベスピール倒る、同胞三千万の英國民は、正に自由の爲に黨せず、反て惡逆無道の壓制力に偏す。ヲイヅヲルス之を見て遺恨腸を裂く、英國に歸つて、空しく自由の爲に慷歎し、精挫け氣落ち、惘々自失、則ち万事を廢す。此時に當つて、若し彼れが愛妹なかつせバ今の詩聖は既でに塵芥塲裏全く聞ゆるなきの人にてありしならん然れども、ドロセアは、之を伴つて鄙の片田舎に入り、暫らく時勢の變動を兄の腦中より洗却せしめ、或る時は共に森々たる樹の下途を逍遙し、或る時は共に青草緑々たる圓山の巔きに登り、優々自適、世と全く相忘れて兄妹ともに樂しみたり。於此乎、ヲイヴヲルスの精氣復活し、心腸再び熱し、宇宙は、其の失望の天地以外に、更らに一種の新天地を備へたる者の如し。之れよりして、彼が吟腸優渥、更らに遺恨なきに至り、其の咏出ずる玉露の點滴は、永遠に白銀の輝いたる如く、吾人後生の心靈を刺、實に是愛妹ドロセアの賚ものにあらずや。ヲイヅヲルス嘗て之を謝し吟じて云く

"She gave me eyes, she gave me ears; And humble cares, and delicate fears; a heart, the fountain of sweet tears; and love, and thought, and joy."

而して、彼れが粗暴剛強なる想像は、之によりて優さしくされ、彼れが高壯偉大なる樂しみは、亦之によりて其の温和なるものを加へられ、之によりて田舍人の正直を味ひ、之によりて賤の女の潔白を知り、之によりて茅屋陋舍の内に無限の愉快あるを覺へたり。而して此等の最も優なる感覺の吟じ出さるゝに至りたる、實に是れ愛妹ドロセアの賚ものなり。

〇宮もわらやも

蟬丸は逢坂のほとりに庵を結びて清明の夜に琵琶を彈じ流泉啄木の調に思を寄せて歌ふて云く

世の中はとてもかくてもすぎぬべし
宮もわらやもはてしなければ

然れど彼れ目は盲ひにして且つ之を慰さむる妻もあらざりけん吟調自づから悲しくして樂々たるホームに在る輩らとは比すべきにあらず。吾人之を聞く箱根山の獵夫年二十二、血氣盛んにして愛情多し驛の一娘と相知りて遂に何んの妨げもなく結婚し山傍往來もなき片ほとりにわび住ひして天下の治亂をも知らず人世の榮辱にも關はるとなし嘗て爐邊に獲物を

燒て共に食ひ且つ歌ふて云く

世の中は兎ても角てもすぎぬべし
宮もわらやもはてしなければ

○子供の敎育（其二）

デフホレスト夫人述
山田邦三郎錄

三、品格を正しくする事

今度は少し品格の事を御話し申しましょう。子供には、毎日何か働きをさせることが大切です。女の子であるなれば、部屋を掃除させ、自分の臥床を仕舞せる樣な事をさせると、よろしい。たとへ、後で直さなければならぬ樣な事があるとも、させるとよろしい。斯の樣にして、段々家の治め方を覺へます。

僞を云はぬ樣に敎ねばなりませぬ。貴國では、よく人ゝ挨拶する時に、人を喜ばせようとして、色々、ない事を申したり、又其人の前では、大そう其人を譽め、後では其人を誹る樣な人がありますが、これはいけません。これは、子供に僞を云ふ手本を示すことであります。英國で或る人が、自分の家の前の石垣を積替ようと思ひました、其子供が之を聞て、石垣を崩すを見たいと申し、父親は崩す時は見せると申しました。併し、後に、其子供の留守の時に之を崩して、積替て仕舞ました。子供が歸たとき、何故に私に見せて呉れなかつたと申しましたら、父親は、再び其石垣を崩して、積替て子供に見せました。其入費は、百圓もかゝりましたなれども、子供に眞實を敎ゆる爲に、斯樣致しました。何か物事をする時には、必ず之を仕遂げる樣に敎へなければなりません。決して中途にして打遣る樣な、慣をつけてはいけません。

母親は常に子供に親しくして、何事も匿さず、母親に告げる樣にしなければいけません。母親は、子供の朋友になり、共に遊ぶ樣にして、子供は他所よりも、自分の家を最も愛する樣にするが大切です。ある子供に、お前の家は、何處だと尋ねましたら、母親の居る所だと答へました。この樣に、母親と子供が親しくあると、子供は何んでも、自分の爲た事を、母樣に告げます。そこで、母親は、子供の惡き慣も善き事も、よく知れて、惡を除き善を勸める事ができます。

子供が惡き話を見聞しない樣に、氣を付ねばなりません。私の國では、猥褻なる書物、及畫は、法律で禁じてありますが、惡き人は、秘密に出版して、子供に與へることがあります。貴國でも、同樣でござりましょう。故ゑ、母親は氣を付るが大切です。

信者なる母親は、子供に神に祈る事を敎へねばなりません。又、聖書の言をも記臆させて、早く信者にしなければありません。罪は恰も木に生ずる虫の如きものです。花を傷めぬ前に、虫を取除かねばならぬ如く、罪も子供の性質を傷めぬ前よ除かねばなりませぬ。早く神の事を敎へ、神を信ぜさすると、罪が除かれます。

終に、今一つ申しましよう。親の命令には、直に從ふ樣にしなければなりませぬ。よく覺へませんが、たしか近頃死なれた獨逸帝と思ひます。或時、其太子に仰せらるゝに、人の下にある時、上の者の命を奉ぜぬものは、人の上に立た時に、人を從はする權を取ることが出來ぬと申されました。子供の時に、親の命に從ひませぬと、後來が案ぜられます。又度々繰返して申さず共、一度て直に命を聞樣に仕付ねばありませぬ。

○沙翁戲作女學ものがたり　（第一齣）　是空子譯

女大學。是は久しう此の大和の御國に住まひ候ものに候へども、今は早や身を置かん寄邊も之れ無く覺へ候ほどに、淵河に身をや投げんと出で立ちて候「思へば邯鄲の夢まくら、覺めては實にや、うたかたの、浮世の常の成れの果て、歎つも効なき憾みなれ、歎つも効なき憾みなれ」とかう申すほどに、早や飛鳥川の流れに參りて候、あわれ昔しの乙女等よ、もし緣わりてろの上みを、思ひ忍ばん折あらば、たゞ一遍の回向をたのみ候ぞ。あはれ昨日の瀨は今日の淵、死出ゆく人の迎ひなれ「左らばと計り飛び入らん、其時さつと吹來る松風に、衣へんぱんと飜へり、岸邊に立たる木に掛る」。

針箱。此は同じ思ひの人も候ふものかな、其處に身を投げんずるは何人に候ぞ。

女大學。今ま聞こゆるは松風か、左らずば狐狸妖怪の迷はしならん。南無阿彌陀佛、南無

針箱。御持ち候へ、世をはかなみて消え入る人ところ見侍る、妾わも同じ不運なれ、何如に、語らひて切めてもの、三途の友と成り申さん。

女大學。之は殊勝の仰せ哉、然らば玆にもろともに、切めて怨らみを語り申さん。

天黑くして星かゝやぎ、松風の外か音もあし。抑も大御代の惠みとて、何れも幸に遭ひぬるを、何とて斯くも不運なる。むかし、玉樓金殿の饑ぎみより鄙の茅葺き家の娘子まで、皆な吾を師匠とし、朝な夕なに尋うとまれ、下にも置かずもてあされしを、今まは西國の新風俗、男女の間だを

近くして、吾はおひ／＼に遠ざけられ、折ある毎に卑しまれ、斯まで落觸れ果てたるは、世に亦となき不運ぞと。歎くを針箱なぐさめて、其は君のみの事ならず、吾とて同じ不幸なれ、思ふぞ反つて怨めしき、抑も古しへの姫達は、吾を手掛けぬ人ぞなき、王侯貴人の御嫁入り、思ふ同士の縁組にも、吾は必らず伴はれ、終日居間にかざられて、優しき手々に撫でられて、束の間だも棄てられず、又或る時は人知らぬ、文の玉梓を預りつ、又或る時は佳人に倚り懸られ、人知らぬ歎きを聞たるに、今まは無下に棄てられて、果敢なき事に用ひられ、才ある姫には遠ざけられ、斯る不運に會ひぬると、如何に口惜しう候ぞ。いかにも同じき成れの果て、昔し一と間に居合せたる、近き縁しも空ならず、いざもろともに打連れて、いざ／＼ともに打連れて、

○小女の一言、國政を改む　　鈴木れい

原文は獨逸小説なり課業の餘暇戯れに之を譯して寄送す

波斯國王嘗て近郊に獵遊ありし時途上にて渇を覺へ耐へ難くありしかば從者をば暫く路傍に待せ置き王獨り森林中に入りてアチコチと見廻はす中遙か彼方に一閒の農家を認めしかば急ぎ馳せてトある農家の戶口に進み寄りしに内より年倘ほ弱き一小女出で來りつ王は此際只管其の國王なることを覺られざるよう氣を配ばり何食はぬ顔付にて渇を治する爲めに一杯の水を惠れたしと乞ひければ小女は唯と答へつゝ直樣内にかけ入りて程もあらせず盈々と糖液を盛りたるコップを持ち來りて快く王に勸めぬ此糖液は王に取りて實に此上もなき快味のものありしなり去乍ら液中倘ほ糖粕の殘りたるをもて王は少しづゝ幾口にも徐々に之を飲みたり王は飲み了りて其コップを小女の手に返へしつゝ曰へるよう糖液の鹽梅實に上出來なり唯だ憾むべきは液中倘ほ二三片の糖粕の浮び出でゝ口に障はるの一事なりと小女は王の詞の訖るを待ち兼てツは承知の上にて態々殘し置きたるなり王、トは又た何故に、小女、見受くる所貴客は方さに渇き切りたる樣子あり今若し息も吐かず遽たゞしく一口に飲み干し給はゞ必ず腹部を害せらるべし兒は但だ之を氣遣ひて斯くはなせしなりと王は其怜悧なるに驚きて思はずも手を拍ちたり王は又た小女に向ひて貴孃は此一コップの糖液を搾るに何程の莖を用ひたるやと問ひけるに小女は唯だ一本のみと答へしかば王は復た驚き惑ひぬ斯る地方に此の如き豐腴の田畑あらんとは思ひも寄らぬ事なれば王は乃ち乞ふて其家の納税簿を披き見て始めて此地方の田租は格

外に低額なることを知りたり王は宮殿に歸るや否や令を下して其租額を改めて是迄の二倍となしぬ。

一二年を經たる後王は再び此地方に獵遊したり日外の農家を索め戸口に立ち寄りて復た小女に一杯の水を乞ひけるに如何なしけん這度は前度の如く甲斐々々しく急には出で來らず既に二三十分も經たりと覺しき頃漸く糖液を盛りたるコップを持ち來りしが是れとても前年の半分程にも及ばぬ位なり王は訝かしく思ふものからヤヨ貴孃余は前年貴孃の調理せられたる糖液の馳走を受けし獵遊者なり當時其手際の速さよ其鹽梅の好さよ剩さへコップには溢るゝ計りに惠まれたりと言ひ放ちしに小女は眞面目にて曰へるよう左ればなり前年貴客の兒の家に立ち寄られし頃は兒の家には莖太やかなる味甘き糖株を植付ることを得たるゆへに僅か莖一本にて一コップの糖液を搾り出すは最と易きとなりしに之よ引き換へ今頃に至りては三四本を用ゆるも尚ほ一コップの糖液を搾り得ざるなり兒は其如何なる譯かは知らざれども恰も貴客の立寄られたる其日より兒が家及び近隣には皆農作の六ケ敷なりたるを打ち歎きて一向に國王を怨み居りぬ。

王は聽き了りて微笑しつゝ小女に一禮を述べて立ち去りしが此日遽に令下りて此地方の租額は以前の通に復することとなりたり。

○慕ふべき貞婦

女學子此頃陸前の松島に遊ぶ。瑞巖寺の門前に、美なる石碑一基を建て、傍はらに制札めきたる由所書を添ゆ、其の文に云く、

明治元年連そひし夫に別れしより暇まある毎に彌陀の稱號を起して百万の數には滿ちぬれども固より人の力を賴むべきにあらねば去年の春より思を起し前かけ七千枚を七千人にひさぎて半ケ年のうちに金七千圓を得たりしかば此よし北山和尚よねぎまをして後世供養をいとなみしるしの碑を建て孝女紅尼蓮の○文倒るゝをもなほしぬこの碑後年保存のため金五圓を瑞巖寺に收め侍るになん

明治十六年四月建之　宮城縣仙台清水小路氏家厚持妹　同直子

○百人一首一口話　鈴木弘恭述　八木猶二錄

蟬丸

これやこの行もかへるも別れてはまるも知らぬもあふ阪のせき。

此の歌も後撰集にのせてありますが。後撰にはわかれつゝ

とあり。いづれにても大意は違ひません○これやハ。コレヨ之。かやうのやは指辭に非ず。俗言のヨに同じ○別れては云々は。此の關にては知る知らぬ人皆別れ。また知る知らぬ人皆あふとの意之○あふ阪のせきは。京と大津との間にありて。京より東國に往來するには。必ず此の關を通行します。さてあふ阪といふ名を人に逢ふとにかけて詠れたのであります○一首の意は。これより此の他國へ行く人もまた京へ歸へる人も。知る人も知らぬ人も。皆この關を出れば各々別れ〳〵にあるとてあるが。さてまた知る知らぬ人も落合て逢ふのも此の逢阪の關であるよと之○語格は。一段切れの歌にて。あふ阪のせきと結べるは、あふ阪の關なりといふ意にて。則ちなりといふ言を添て解する例之。さて行もかへるも。知るも知らぬも。といふやうに二つ重なりたるものは。甚た輕くなる例にて。徒と同様のものであります。

○戒指考　（其四）　久松定弘

又英國の北部にてハ十月六日即ち「神聖フイデス」の祭日をもて左に陳るが如き咒法をなし菓子を製することあり其咒法ハ三人の未通女相集りて供に麵粉、井水、砂糖、食鹽を混じこれを一箇の爐中にて燒くあり這際三人の處女たがひに談話するを嚴禁す恁て三人ハ爐邊にたちて菓子を翻轉す事三回にして菓子の燒あがりたるときこれを大小なき樣三片にきり各々その一片をとりて更にこれを九片に細斷しさて七年前に結婚したる婦人より其戒指を借きたりて嚮に細片に截りたる菓子を一々戒指の孔にとほし其菓子ハ處女等これを自家に持かへりて衣服を脫換るとき食竭すべきものとせり而してこれを食するときハかならす秘文を唱ふるを例とす其咒文に曰く「吁善良なる神聖の「フイデス」よ汝ハ今宵妾等に慈悲を垂れ妾等の情人を這處に携來り妾等をして將來の所天を見せしめよ又妾等の夢をして貞正にして且潔白ならしめよ」と此秘文を唱へ畢りて三人の處女ハ相伴て一室に入り同一の臥牀にて寢に就くあり且其際嚮に借用したる戒指を臥牀の上に懸置ば夢裡に見る所も益〻分明なりといへり。

英國「ソンメルセットシール」にてハ戒指をはめたる指ハ他人の瘡傷を醫するの効驗ありとし又他の指にて觸れば害となるべきときも戒指をはめたる指をもて觸るときハ其瘡傷ハ暫時にして癒へ痂を生すべしといへり。

又宗教上の傳說によれば「サンクト。ヨーセフ」と「サンクト。マリヤ」（即基督の父母なり）の婚姻の際には「オニクス」又ハ「アメチスト」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

といふ石をもてつくりたる戒指をもちひたりといふこの事實を發見したるは紀元後九百六十年の事にて「イェルザレム」地の寶玉商某「オニクス」石にてつくれる古き戒指を「クルシウム地」の寶石商に賣わたしたることありしかるにこれを買とりたる商買ハ幾程もなく其戒指の由來を知り得たりといふ(未完)

小説

石橋忍月病氣全快の處「都鳥」の續き掲載の儀は止がたき事情ありて相斷わりたき旨申出られ候に付乍殘念此旨讀者に御披露申候
○但し兼て廣告仕候須藤南翠外史並に山田美妙齋の新作小説は其出來の上續々掲載可仕に付暫時當欄内の物さびしさを御容赦ありて木立物ふる夏の樹かげに彼の秋を忍ぶの御勘辨ねがはしく候

○小説神髓

蘇格氏著　ケ子ルヲルス　(第十六回)

驚ろくラブサート夫人を慰さめてエーランドの申すようは斯かる時に惶てゝ逃げ出すときは倘更らに見咎められて彌よ危うし先づ此儘にゆる〱と走りて御覽あれ彼處の小高き堤の下を迴り其陰に入りてより頓く驅け去り申すべしとて殊更らに落附はらつて手綱を綾取り既でに堤の下に來りてよりは双鞭音高く逸走いだして驅けさせたるが遙かの彼間に數十騎の群集あり盡しケ子ルヲルス城饗應の御馳走にとて近郷近在の手品使ひ藝人ども相率ひて招きに應じ參るありけりこれ屈强として其の仲間に混じ入り夫人は顏に覆ひたる濃色のベールを以て面てを隱くし知らぬ風して隨ひ行きぬ。

斯くてトある馬つぎ場に至り皆の者の暫時息らふと共に暫し足掻を止めて後りへを振り見ればバー子ー最早や近づきたり此時エーランドの名を召びて連りに笑ふものあればギヨツトして其方を見るに思ひきや昔し靴直しの仲間としたる彼の悪戲者のヂツクなりヂツクはつら〱とエーランドを見て一處に居るは何人ぞと問ふ、之か之はツノ己れの妹とだ、ヂツク片頰よ冷嘲して復たび語ばを發せんとするときバー子ー既に玆に達しぬ。

バー子ーはきよろ〱と群集を見廻わしながら、之は皆なケ子ルヲルスに參るものか、皆の者一同に、左樣に候悉く御召しに應じ參上いたすものに候。バー子ー亦た少し離れて立つたる二騎を見止めて彼れも同樣に參るものか、此時群集は初めて斯る二騎を伴なひ來れるを知り皆な不審相にして無言なり、バー子ー少し奇しみて早や近う近寄るとき、ヂツクは何の苦もなく大膽氣に、左樣〱矢張りお城へ參る手品使ひの兄

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

妹であります。左樣か然らば皆の者時刻を違へず馳せ參ぜよと意氣揚々として指令を遺しアブミに一と當して其儘に驅け行きたり、蓋し思ふに彼は未だ夫人の出奔を知らず昨夜の毒藥によつて今日は既に重病となれりと信じ早朝未明に己れ先づカムナプレスを出發したるなるべし。

エーランドは危急一髮の難所をチックの一言によつて輕ろくも免れ得て、チック坊お前は中々甘いでは無いか何うして自分等がケチルチルスへ行くとは知つたる、と云ふにチック得意氣に嘲笑つて己れだつてお前等が度々後を見て心配らしうするを察して居るハ何でも臭ひかけ落と見たは僻目かだァ、夫はともかく己れもケチルチルスへ行く處ろだ先づ〳〵一處に行ふよとて年には似合はぬ不敵の胆力平々無頓着に言ひ放てり。

夫人は斯る有樣を見聞くにつけ抑もや吾が夫は當時世に幷びなき貴人にしてお上みの御成りに斯迄での御饗應あらんとす城は高く人は多く勢威飛ぶ鳥をも落すと風評するに其の終生の友たるわが身には如何に落振れたりとも今日の姿は何事ぞ素生卑やしき下郎等に世に有るまじき不敬を言ひかけられ剰さへ毒を飲んで毒を消し斯く艱難して落行くと身は素と何如なる因緣ぞと馬上に空しく天を望み遥かに城郭をにらんで涙漣々として下る。

斯くて其夕方と成れば夫人はエーランドと共に城外の片ほとり最貧しき氣の客舍に投じ明朝はいよ〳〵城中に入らんとす夫人はエーランドを招きて今日の信切を謝し我は之より獨りに、て城に入るとを得べし汝ぢが涯りなきの眞誠は異日必らず報ゆるの日あらん是はたゞ當座の寸志のみとて指に穿てる黄金の指環を取て與ふるにエーランドは固く之を辭し奴はトレッセリアン殿の仰せを蒙り夫人の御身を安んじ玉ふ處ろまで伴ひ參らすべきあれば其の御惠みは明日確かに先途に安着し玉ふの后にこそ受け奉るべし今日は慣れぬ御旅路にて定めし常あらぬ御疲れあらんゆる〳〵と御休み玉へとて引退く。

扨ても其翌朝に成れば夫人はエーランドを伴つてそぼ〳〵と城門近う歩み寄り何如に設けて城内に入らんやなど思ひ煩らふ折り人足頓かに高うして又もや昨日の群集に會ひ群集の中にも例のチックは殊更に聲高く之れは〳〵お仲よしのお二人樣何を遠慮さるゝ斯う參られよと案内して難なく之を群集中に混入せしめ第一門第二門を事もなく通り拔たるが第三門に至つて門番の老父仲々に頑固で門鑑がなければ通せぬと言張

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り何やらん連りに暗誦し乍ら傍目もふらず頓着せず。

佳傳

○女流の畸人　　忍月居士　錄

余近ごろ病に罹りつれ〴〵のあまり伴蒿蹊の畸人傳を讀む中に女流の行爲心術に於て尊む可く感ず可く憐む可きものなきにあらず、乃ち女流數人の傳を拔萃し淑女方の御覽に供せんと欲す固より余は是を以つて淑女方の龜鑑になし玉へと云ふに非ず只畸人の逸事、猶ほ其些々の間に自ら慕ふ可きの風韻有るを示すに止るのみ。

若狹綱子

若狹の國小濱の府下に、病狼われたるとありしに、某士のうちに使る丶小女、十四五歳にて綱といへるが主の幼兒を背に負て、そのわたりに遊ひける時、彼狼不意に走り來りて、とびつきけるを、綱は急に己が裾をまくりて背の子をおほひ、うつぶしになりたる時、狼は綱女が尻へ喰付きぬ、さる間に人々聞つけて集りしかハ、狼は卽走りさりたり、さて彼女を物にのせたるまてハ尙詞たしかに、主の子の故なきよしを告しが、道にて息絶たり、やがて其親の許へ舁入たるに主の妻も聞てかけり來れるに、綱が母、幼兒をわたして、血にはまみれ給へど、つゆばかりあやまちさせ奉らさりしを悅びはべるといへり、此母もたゞものにハあらざりけり、此ことを國の守聞し召て二なく憐がり給ひ、大なる石碑を立て、忠烈綱女の墓としるし、銘は儒臣小野忠次郎に命じてかゝせ給ひ、三日大佛事を行ハれ、遠近の人ども詣り、詩歌の作こゝろ〴〵に手向ぬと聞し。

加賀千代女

千代女は加賀の松任の人にて、幼きより風流の志ありて、俳諧をたしむ、しかれども其師を得ず、是かれ行脚の人にとふに、美濃の盧元坊と稱すると、皆同じ、こゝにして殊更に行て學ハんとおもへるに、折しも行脚して來しかば、其旅宿に就て相見をこひ志をのぶ、草臥たりとて寢てありし所へゆきて敎をもとむるに、さらば一句せよといふ、初夏の比なれば時鳥を題とす、やがて句を吐たるよ、元其たゞ者ならざる氣韻を見て、其句をうけがハず、是はたれもすべき所ありといふ、さらばとて又一句を吐おほうけがハざると初の如し、元ハ既に眠につけども女ハなほさらず沈吟す、其眼のさめたるをうかゞひてハ又一句をとふ、かくて數句に及つひに曉天に至る時、元起て終夜さらざりしや、夜ハ明たりやとおどろく、時に千代女

ほとゝぎす郭公とて明にけり

といへるを大に賞し是也々々、汝他日此意を忘るゝとなくは名天下にふるはんと、師弟の約をなせり、果して女流にめづらしき此道の高名に至れりこれはまだ少女の時なりけりし、後嫁どりし時

しぶかろかしらねど柿の初ちぎり

まことに俳諧にてをかし、廿五歳にて夫にわかれし時

起て見つ寐て見つ蚊屋のひろさかな

生涯身を全うし、一人の男子よ夫の家を嗣しめてのちは尼となりて別居し、素園といふ、書も越後の呉俊明に學びて頗る風韻あり、或る人書を上みに讃を下に書てたまへとのぞみしに朝顔のたれたるをながくかきて

朝顔や地にさくとをわぶながり

句のさますべて女流の趣ありてつよからず

朝顔につるべとられてもらひ水

など人口に膾炙して賞せり永平寺の長老道のついでに宿とひたまひて、一念三千の意を句に作るべしともとめたまへるに

千なりも蔓一筋の心から

これも世に語りつたふ、老極りて死せりとぞ、句集有て世にひろまりぬ。

柏原捨女

丹波國原田氏女捨子、其家に嫁どりして男子五人ありて後夫死し、たゞちに磐桂禪師を師として尼となり眞閑と號す、幼より風雅に志有り、六歳の時

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

といへり後、季吟法印にまなびて、はいかいに名あり

粟の穗や身は數ならぬをみなへし

花をやるさくらや夢のうきよもの

など人これを稱す、或諸侯道のついでかの家をとひたまひて

柏原にをしや捨置露のたき

といふ句をたまひし事も有とぞ、尼となりては省悟せる所師の旨にかなひ、終に播磨網干龍門寺の傍に不徹庵を創して今猶傳れり其自畵贊田氏にのこるは

秋風の吹くるからに糸柳こゝろぼそくもちる夕かな

これは薙髮せる時の歌にやとおぼし。(下略)

寄書

○いらつめの批評を讀みて思ひ得たるとども　本郷 [illegible]生

余偶々いらつめ第十號を閲せーに其批評欄内に和田のとろみ子が戯譯に係るみな

れざるをの批評を掲げたり余深くとろみ子を識る者に非ず將た其腸路をかへるゝ者に非ずと雖も曾てミナレザを一讀して聊か心に感ずる所あり大にいらつめ批評者の思へくと異なる點も無きに非ざるを以て茲に女學雜誌の餘白を乞借し一二妄言を吐露して該批評者の叱正を求めんとす蓋しおぼしき事言へぬへ腹ふくるゝ心地すればなり。

批評者へ第一にミナレザヲの譯者が「ユニチイ、オフ、スタイル」を破りたるとを大に難じたり又譯者へ此難あらんとを知りて豫め其自序に於て叮嚀殷勤に之を斷りたり成る程「ユ、オ、ス」を破るとへ修辭上あまり好ましきわざにへ非ず若し譯者が常に得意に此種の躰裁を採用して文を作らんとならバ其へ大なる僻となるべし其時へ批評者も非難せよ余も非難せん然れとも其自序に徴すれば該書の作爲へ客中遣悶の爲め言へゝ慰み半分に思立ちたる迄にて之を以て作文の模範とし學校の教科書と爲さばやと企てしやにも相見ねず又向後此種の文躰を不斷使用せんと頗言せしとも相見ねず且つ小說の如く人心を娛慰するを最第一の務とするものに於てへ時としてへ故らに修辭の正則を破り變則を採用し「ビユーチー」よりへ寧ろ「オヂチー」を以て人を面白がらするも亦一興なり(「オヂチー」を以て人を面白がらせ得る限へさ)れぱミナレザヲに對つて「ユ、オ、ス」を破るとを强ちに非難するへ更に大躰に通せさる論也謙遜なる譯者へ萬一理解力の不足なる彼れ批評者の如き者の妄非を受くるとも有らんかとて態々叮嚀殷勤に其旨を斷りたるさへ余より見れば配慮に過ぎたるわざなりと思ふなり(如何となればミナレザヲへ余が所謂「オヂチー」を以て人を面白がらせ得る限内に在るべき性質を備ふればなり)然るに如何よ批評に苦しめばとて之を一大事と難ずるへ甚だ以て心ゆかぬとなり余へミナレザヲが「ユ、ス、ヲ」を破りしをぱけちりんも不滿足に存ぜざるなり。(未完)

柳を見て感を起す　大坂一致女學校生徒　井上　たつ子

きゝ入らぬ風も有ふにやなぎかなといにしへ人の口すさみしへげにそのこゝろをうがてるかなおほよそやなぎのごとく世にすなほなるものへあらじいかにはげしき雨風にあふとてもさからはずして己がたはやぎたるさまをかへざるころ柳の德ともいふべけれされバ人もこれにならはざらめやさへなくしてわずかのことにさからひなどするハ柳にだもおとりたりとやいはましまいてをみなへ御神よりすなほなる性をあたへられしものなれぱわきて己をつゝしみ柳にならひて其うまれつきをうとなはぬやうつとむべき事なりかしすべて何事にてもさからはずすなほとやさしきをつとるむを女の德とやいはましなどはしおもして庭の青柳をながむるをりふし心に浮びしことどもをそのまゝにかくなむ。

同　同　富海すゑ子

きりすとの教のみちハ風をれの氣づかひもなき柳なりけり　同

花發風雨多

さくら花さかばと待しかひもなく雨風多きうき世なりけり　同

同

おもひきや花のさかりを心なく嵐に雨のすさびけんとへ

愛子を失ひし人の許に送る消息文　同　片倉　綾野

さきつ頃より和子さま御わずらひにてくすしの御きゝめもなく遂に春の淡ゆきとともにはかなくきえうせたまひしよし聞さへ　いとゞむねせまりてひとひらの御くやみ申上るもあとやさき硯のうみもおつるなみだにいやましてすり流したる墨のあいろもうすくとにじみがちにてわかちかねたまふべしうからにもあらぬわらはさへかくあるなればまいてそなたには是まであさゆふに人となれかしなれかしと御心つくされし其かひも今へとりべ山のけぶりとなりておもかげをゆめにみるくくらしたまひぬらんと推しはかりまゐらせて心づらく思ひめぐらし侍るかならずこゝろふさぎて病ひなどひきおこしたまふなよ。

かりの世のさくらの花をように見てけうへみたまもあまかけるらん

寄竹述懷　同　横川みね子

なよ竹のなよくしくもかりの世の風にもまるゝ身をいかにせん

庭に櫻の花のちりたるを見て　同

ちりはてゝ錦の庭となりぬればたゝまく惜しき花の下かげ

吾基督の敎へ　同　谷　ふみ子

うちよする浪あらくとも動きなき磯のいはほといふべかりけり

ほどへて友人某にあひければ　同

わくらはに巡り合ひつゝ忍ぶかなともにながめし山さくら花

大阪練兵塲を過る　同　大河ぬひ子

みたれ世の昔のあとをわすれじと軍まなびの怠りもなし

寄笛述懷　同

くれ竹のよにたつふしもなき身にへいたづらにふく笛の音ぞかし

偶有感　同　堀江みよ子

海山にたとへて見るもおろか也はるかにまさる神のみめくみ

新報

○バーリントン自由日々新聞に掲げたる根本正氏の投書

(American Books in Japan.)

左の一篇は米國バーモント州バーリントン府バーモント大學の根本正兄が本年四月六日フリープレッスに投したるものなり譯して貴社に寄せ根本兄の厚意を謝す。　中川永輝

日本にては英人の著書よりも米人の方廣く世に行はる昨年英米國が日本に輸入したる書籍は二十萬四千部の多きに達し内八萬五千部は英國より十一萬九千部は米國より輸入されたる者とす而して此等の書籍が我が帝國を進歩せしめたるの事實は著るしきものなり就中我が日本の婦人が英書を解し或は帽子を被り「コルセット」を着るとを學び外に亦大に心性上の教育に付きて進歩を爲したるとも其著

しきものゝ一なり近時まで女學雜誌等の記者は皆男子に限りたり然るに本年三月に至り東京婦人矯風會書記井淺及び佐々城の兩夫人は第一の婦人記者として日本の社會に顯れ出て矯風雜誌を發兌し彼のジ、ユニヲンシグナル雜誌の如くならしめんとを期せり。

其他著るしき進歩の事實は日本人が半專制立憲政躰に滿足せざると是なり日本人は支那及び露國の後に立つものにあらずして眞信なる愛國心に富みたる日本人は來て千八百九十年には英國の如き憲法を有せんとを希望し居れり所謂日本のビスマークは其の掌中に長く權力を握らんとを欲せり又た日本人は其府縣知事を其府縣の人に限り而して投票を以て之を撰與せんとを豫期し居れり斯の如く英米國書籍が日本人に與へたる勢力亦た大なりと云ふべし日本に施す政治上に於てはグラツドストーン氏宗敎上に於てはムーディ氏社交上に於てはウヰラード孃の如き者を生じたるは昨年中に輸入されたる二十萬四千部の英書の賜ものと云はざるべけんや。

○婦人の洋服

婦人の洋裝は何如んすべきやは近來の大問題なり吾人が思ふ丈けは一と通り前々號に論じ置たる處ろ此頃ろに至り左の如き投書を得たり

吾曹婦人の先導者を以て任ずる貴社記者諸君よ、吾曹ウイマン社會の矯風に盡力せらるゝ貴社記者諸君よ、吾曹婦人は記者の先導盡力により知識に道德に保育上に流行上に大に効益を得しこと誠に少なからず妾は大に記者諸君に感謝すると同時に亦啞然失望して記者諸君を怨らまざるべからざるとあり否記者諸君に再び盡力周旋を請はざるべからざる事あり高木軍醫總監高木博士に偵間の媒介を乞はざるべからざる事あり、記者諸君も御承知ならん貴社雜誌二三十號前に高木先生衣服改良演說を掲載せられし事を、先生ハ「洋服ハ衛生に容貌に萬事萬端に和服より優るなれば之に改良することソ新日本の婦人なれ」と說き且つすゝめられたり妾も此のすゝめに從ひ吾夫に强請して四時一通を調製し日々之を着せり否着しつゝある也然るに今や又々洋服不利害毒の說續々洋人社會に出たり妾何れに從ふべきやを知らず記者諸君乞ふ再び高木先生に洋服の利害洋人の誤解を辨じて吾曹婦人の半疑半信の迷夢を醒さしめんとを盡力紹介あらんとを請ふ

山城吉祥院村　安原　てる

○佛海復た女學雜誌湧出す

佛敎信徒の間だに於て近來に尤も活潑尤も有益なる働らきは其の女學改進に關するの盡力是れなり到る處ろに婦人會を設けて善女坊守を導き又婦人に係る雜誌を發行して其勢力を張るなど眞に比類なき運動にして實以て感佩すべきと也吾人は不幸にして佛敎を信卒する能はざるものと雖ども女學雜誌の記者としては當今大に之を慶賀して止まざるもの也。而して今度前橋に在る上毛婦人敎育會より出版したる婦人敎育雜誌を見ては殊に此感の切なるを覺ゆ、婦人敎育雜誌は每月一回の出版にして二十三の特別寄書家を有しアッパレ末賴母しき眞雜誌なり。

○高等女學校

新校長矢田部良吉君及敎頭能勢榮君は共に聞ゆ渡つたる果斷活潑の人々なり定めし高等女學校に目覺しき改良の行わるゝならんと待構へたる處ろ此頃ろ承ハる處によれば同校經費を增額して是までハ國庫金より七千圓授業料千五百圓なりしを國庫金より壹萬圓授業料を千六百圓となし又別に三十萬圓を以て敎場を增築し從來の講堂を修復し且つ敎則校則等諸般の改正に着手して最早其原案も調ひて目下商議委員へ照會中なる由又來る七月に生徒六十名を募集せらるとのと。

○御聖德　畏くも天皇陛下には新皇居に舞踏場の設けあるを「かゝる遊逸の風は哀世の習はせにて多くは國亡ぶるの前に流行するものなり」と御仰ふせありて取り毀ハさるゝとになりしとか承ハる。

○奇特の女子　在靜岡縣の小野正氏より左の如き投書を寄せられぬ。

余此頃靜岡地方に用事ありて赴きたるとき女學に關する樣々の說を聞し中に頗る美事と云ハ靜岡に始めて師範學校設置のとき同縣士族猪俣範古氏始め家族一同ゟ献金をなされしときの賞狀を得たり實に感するに堪へたり以て此儒反古となさんも心惡し因て貴社先生の參考に供するものなり

本縣士族
猪俣範古母
常　貞

金三圓

其方儀敎育の須要なるを悟將來學事の盛大ならんとを厚く企望するより日夜手業を勉め其工料を積み以て學費の一端に充さんと心懸居候折柄今般地方官會議御下問中小學設立及ひ維持方法の事有之趣範古ゟ傳承候迚感佩之餘積日之勞力を以得る所之金員前書之通本縣師範學校ゟ献金候段奇特之事に候依之篤與置候事

明治八年六月九日　靜岡縣

本縣士族
猪俣範古妻
く　に

金貳圓

其方儀學事奬勵之儀に付ては厚く體認能在家事繁劇之際日夜手業を勉强し夫姑之意に從ひ學費之萬分に充さんと兼々心掛居候折柄今般地方官會議御下問中小學設立並維持方法之事有之趣夫範古ヨリ說示及ひ候を感佩致前書之金員姑常貞同樣献金候段奇特之事に候依之篤賞置候事

明治八年六月九日　靜岡縣

○婦人參觀　大日本婦人衛生會員は去月十九日長與衛生局長の案內にて神田和泉橋外の內務省衛生參考室を參觀したる由。

○島田かし子の英文報告　四月十一日のクリステアン、インテリゼンスには左の如き評を載せたり

此頃ろ女學雜誌の附錄と爲りたるフェリス女學校卒業生島田かし子が日本に於

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ける婦女子の狀況と題する一文章を見たり英文にして其の包括、明晰、流暢、結構、精神等員に申分なく之を上等の文章と許すべし當國に於ける最良の女學校の卒業生にして若しこれ丈けの文章を作り得ば定めし喜ばしきとなるべしと云々。

○婦人交際會　日本橋區開業醫諸氏の內室は從來絕て交際なかりしが今度榎本のぶ子河野常子立花千代子倉成のぶ子松山雪枝子猿田てい子三宅なみ子等の發企にて去る十八日婦人交際會を一驅亭に開き參會員は百餘名に及び席上演說及將來の維持法の相談をなし餘興に淸學福引の催しありたりと云ふ。

○桑港婦人交際會　在米國桑港の日本婦人中には婦人交際會と云ふを設け同會を日本人倶樂部內に置き專ら婦人の親睦を厚ふし婦德を全ふするを勸め時々慈善會を催し其の收入金は日本人倶樂部內の病院其他慈善の用に供する筈なりと云ふ。

○東京產婆學校分校　本鄕區湯島切通町廿七番地の同校は設立に猶ほ淺けれとも追々生徒も增加し隆盛に赴く由校長は醫學士櫻井郁次郞君にて敎授には年年間同氏に就き該學幷に實地を硏究したる松子女史なりと云ふ。

○仙臺の女學校　仙臺には宮城女學校と申し一致敎會派の設立にかゝるもの東二番町に在り敎師はプールボウ孃ホーイ夫人及び人見ぎん、稻垣ちよ、石黑芬の五氏にして生徒は五十名あり卒業は本科四年預科三年にして今ま尤も高等の級たるは即ち本科一年生にて松平知事及び和達書記官の兩令孃玆に在り當今新學舍を建築中なるが結構は宏壯なる西洋館風にして講堂寄宿舍敎師室の三棟を備へ來る十月迄には出來の筈尤も建築費は同地方の有志者より二千圓の寄附あり其余は多く一致敎會より供へ出すものなりとぞ。

○伏見婦人講習會　去五月一日第一年の紀年會を伏見倶樂部に開らき婦人の參會者二百餘名演說音樂などありたる由因に同會は人の妻女に算術作文讀書編物等を敎授し目下二三十名の會員ありとのこと。

○女生徒學友會　島根縣尋常師範學女子部生徒は題號の如き會を設け去二月十九日に發會を開らき會員は數十名あり其會長は松村ゑい子副會長は朝山しけ子なりと云ふ。

○廣島私立幼稚園　廣島に於ては師範學校附屬幼兒保育塲の設けありしを今度廢塲になりしを以て同校女敎師平松三木枝氏は令妹二人をして私立幼稚園を仝地慈仙寺內に設置せしめしに頗る區民の贊成を得入園者も既に數十名ありしと云ふ。

○關西女學敎育會　京都高等女學校生徒には今度女に敎育を振興さんとの目的を以て題號の會を設ふけ向後月次一回東洋の女學と稱する敎育雜誌を刊行し會員に頒たんとの計畫ありありと云ふ。

○私立高田女學校開校式　同開校式は去月十九日を以て執行せり當日の出席員は來賓七十名生徒五十四名都合百二十餘名にて同校の門前には國旗を交叉し午后三時二十分報鈴の響くを相圖に一同式塲に着席し先づ敎員デビス、井上チセ並に東京婦人矯風會員矢島カジ串田シゲ諸孃の英語唱歌及び讃美歌暗誦あり次に創立者總代森山信一氏は開校の趣旨を述べ次に校長栗原トヨ子及び各生徒へ祝詞を朗讀し其よりデビス孃の英語演說(井上チセの口譯)あり續ひて矢島カジ串田シゲ二氏及び田中貫一、宮川某、疋田新二郞諸氏の演說あり次に敎育生徒一同の唱歌ありて全たく式を終りたるは四時三十分の頃なりと云ふ。

○松本婦人矯風演說　四月十日松本南深志町第十四國立銀行にて同會を開らき片山やす子開會の主意を述べ津田仙平田平三兩氏の演說ありて有志婦人二百五十名計り男子四五十名の參會者ありしと又十二日の夜は平田平三氏の宅にも津田仙氏を請じ更らに同會の規約を設け役員の撰擧を行ひしと云ふ。

小供談

○馬鹿正直

或る田舎に半次と申す正直なる人がありました或日隣家にて針一本貰ふて歸りがけ枯草を積みたる車の上に刺しおき歸りました母は半次に向ひ何所に行きて何をせしやと尋ねましたゆへ隣家へ行きて針を貰ひましたと申しましたに其針は如何にせしやと又尋ねましたから荷車の上へ刺しておきしと申しましたら母はソレは大變な過りジヤもし再度貰らへは必ず沓下に刺して歸れと敎へました半次は此次は屹度其通りに都合能く致しますと答へまして後二三日を經て母は今日は何所にて何をせしやと尋ねました半次は今日は隣家へ參りまして能く切れる小刀を貰ひました處で先達て母樣の御敎に從ひまして沓下に刺して歸りましたが御覽の通り沓下は破れてしまいましたと答へました母はそれわ大變な違だ此次貰たら必ず隠袋の中へ入れて歸れ必す間違ぬ樣心得べしと申し聞けました

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其後半次は隣家へ參りましたに狗兒を與へました半次は喜び直ちに狗を握み隱袋の中に入れんと致しました隣家の婆は迚も這入らぬゆへ抱きて歸玉へと勸めましてもイや母上の敎へで御座りますとて無二無三におしこみ隱袋の破るゝも狗の鳴くも用捨なく急ぎ家に歸りまして母上に申しまするよ今日は狗兒を貰ひまして慥に隱袋の中へ入れて歸りましたと眞面目よて狗兒を出しましたに狗は既に死でおりました母はこれはしたり又間違つた此次貰へば首に綱をつけ引き歸るべしと敎へおきましたゆへ今度は屹度間違たと叱られぬやう隣家へ行く路すがらも首に綱を付け路を引き歸ることゝ口の中に云ひながら隣家へ行きましたに婆は生鯛一匹を與へましたこれこそと直に首に綱を付けまして路を引きて歸りましたに途中に數多の犬がおりまして何時の間にやら其魚を食ひ去りました一生懸命に前を向きて引きておりました半次は少しも知りませす門口へまて歸りて見れは己は只綱のみ引きて歸りまして魚の頭さへも無かりしゆへ、茫然と立ておりましたに母は何事ぞと尋ねまして其次第と知り母も亦呆きれたる顏をして又間違ひたり此次は必す間違ぬ樣抱きて還れと敎へました其れ故隣の婆が猫を與へましたに其猫を抱きて歸りましたが中々の荒猫と見へ半次の顏を掻き散らしまして家に歸りました時は血塗れてありましたあれど猶其猫を抱きて歸りましたから母は可愛相に思ひましてヲヽ、此次は箱を持て行きて入れて歸れと敎へました半次は思ふに既よ度々の間違をしたり此度は決して間違はぬ樣此方より其備をなし箱を持ちて行かんとて一の箱を抱きて行きましたに婆は何の事ぞと尋ねましたゆへ何も用事は無けれど何か貰ひ度きことなりと答へました婆は暫く考へて居ましたか何も與へる物のなかりしゆへか又は他に解のあることか其娘を與へました半次は直ちに娘を箱に入れまして自ら擔ぎ歸りまして申しますには母樣今日は慥に箱に入れて歸りました母「何を 半次 隣の娘を貰ひまして今廐の内におきまして草をやりてありますと申しましたに母はそれなら羊の目をやれば善きにと申しました其心は羊の樣に柔しき目をして娘を待遇へば善きにと云ふ意でありましたに半次は直ちに牧塲に出て行きまして羊の目の玉を拔き出しまして彼の娘に與へましたに娘は氣味の惡き人かなと驚きなから走り歸りまして他の人の嫁となりました。

附告　本誌第百九號及第百十號に附錄として掲載せし萬國婦人大會景況錄は引續き掲載すべきの所該記事の新聞未到着の爲め延引いたしたり然し次號には必らず譯載することを得べしと存候。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

宮内省御藏板

婦女鑑

全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月
皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其徳性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舗ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランヿヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各賣捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林
吉川半七恭白

定價金壹圓　郵送料金四拾錢

女學雜誌第九十七號に批評あり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌代金滯候御方

にして毎々御催促申上候とも尚ほ御拂込無之仁あり而も其御住所すら分明ならざる向も候まゝ如此き御方に限り以後雜誌上に於て御催促申上候に付不惡御承知被下度候但し本社は專ら情義を重んじ候心得に有之決して輕々しく右樣の取計らひ不仕存候得共何分三四ヶ月以上も滯り居候上毎々の御催促に一報を寄せられざる諸君に對しては實以て不得止の處置と御許容ありたく預め申上置候也

廿一年五月十五日　女學雜誌社會計掛

小生日々女學雜誌社と明治女學校の間に往來致し毎々來訪諸君の光來に接するを得ず甚だ失禮と存じ候に付き此度左の如く略規相定め置き候間右御承知の上來駕を辱ふせば幸甚に御座候

女學雜誌社々務に關する事件は社員に御談じ被下度尚ほ小生直面接可申上儀に候はゞ土曜日午後四時より七時までの間に來社を請ひ度候事

明治女學校々務に關する事件は同校幹理幹事ゑ御談じ被下度尚ほ小生直面接可申上儀に候はゞ毎日午後六時より七時までの間に來校を請ひたく候事

辱知諸君　**巖本善治**

當塾女子部は六月一日より更に毛糸編物幷に作花の二科を増加し「アンクスター」孃毎日出席懇切叮嚀に教授す

東京　本所松坂町 回向院裏　私立　**江東義塾**

●**結婚媒妁所**　東京日本橋區檜物町一番地○全國何人に限らず嫁聟媒妁依賴に應ず

交詢案内

●雇ひたき方（甲）

七　保姆　地方高等小學校に於て幼稚科の保姆を雇ひたきものあり月給は十三四圓まで基督信徒の方を要すとなり

八　家婢　卅年前後にて篤實なるものにて四才五才計の女子二人の世話をなし少々裁縫の事を心得洗濯等を致す寡婦を望む最も月給は三圓位を與ふ

●雇はれたき方（乙）

十　縫師　年齢三十歳位のものにて和洋服裁縫出教授に雇はれたきものあり給料は相談上にて宜ろし

十一　召使　學資に乏ばしく依つて小間使ひとなり餘暇を以て教授を願ひたき十八九才のものあり

十二　敎師　或師範學校にて普通學三年餘修業せしもの學校に七八圓位にて通勤致したく又は他の御内にて入込み教授するならば六圓位にて雇はれたし可成は東京横濱の中を望む

十三　敎師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む

十四　洋行　身元慥なる十八歳位のものにて英漢學も可なり出來るものにて學問研究の爲め貴婦人の歐米に航せらるゝ御方の小間使ひとなりて隨行を願ひたし

摘要

（一）此案内は社員の餘暇になすものなれば手數料を要せざれども双方照會の郵便賃として郵劵十錢御送りの事

（二）前申す如く餘暇の業なれば決して催促がましき申込を爲されまじき事

（三）詳細の規則は本誌第百一號ゑあり

基督教新聞

第二百五十三號　五月三十日發

●社說○ユニテリアンの自語相違●敎報○一致敎會の大會○府下諸學校青年會設立○日本青年傳道會○横濱福音會書籍館○横須賀少年會○紐育通信○其他數件●史傳○回々敎小史（第八）●雜錄○日本基督敎會憲法草案○議論中の人品●寄書○静岡縣囚人保護會社の設立●雜錄●一冊定價金三錢

東京々橋區日吉町廿番地　警醒社

貴女の友

毎月五日十五日二十五日發行●壹部金八錢●六部前金四十六錢●十二部前金九十錢●郵税壹部壹錢ヅヽ

凡ろ婦人たる者一たびは必らず人の妻となり次には人の母となり又一家の主婦とならざる可らず是自然に具る女の役目なり之を女の本分といひ能く此の本分を盡すものを貴女といふ本誌は即貴女たる方々の朝に夕に伴ひ給ふべき友達にとて發行するもの也其中に書き列ねたる事項をば貴女の友といふを始めとして家政保育學藝叢談論說新報の七欄に分ち妻女母親主婦等の心得給ふべき家事經濟法兒女保育法衛生法婦人禮法文學美術及び通俗理科等の事項を解し易く簡短に說明し且は婦人世界に利益ある大家の論說を書き集め又其快樂ともなり模範ともなるべき最面白き寓意を含みたる小說に挿畵を加へて記載したりされば此等の事項をだに落なく心得給はんには適れ文明の世の貴女として愉快に此廣き世界を往來して其生涯を送り尚且子々孫々の榮華をも遂させ給はんと疑ひあるべからず殊に時々附錄として家庭教育の種ともなるべき美しき圖書を刷行せり世に學問に心を寄せ給ふ貴女は更なり一家を經營し兒女養育の役目を負ひ給ふ貴婦人方は必ず邊り近く置かせて須臾も離させ給ふまじき好雜誌なり

東京日本橋區本町二丁目三番地　東京教育社

女新聞

六月十日　第一號發行

新聞（毎日曜日發行）

定價一枚一錢五厘十枚前金十三錢●東京十五區ノ外ハ一枚ニ付郵税一錢

「女新聞」は女子の教育、藝技、衛生、等に關する面白き繪畫、小說、論說、講義、雜報、詩、歌、文章、等を載せたるものなり

廣告の「廣告」

第一號は特に數萬部を摺り立て見本として全國各地の女學校婦人會等へ無代價にて配送いたすべく候。付ては同號へ御掲載の御廣告も有之候はゞ六月五日までに本社へ御送附下されたく奉願候

○廣告料は左の如し（十行以上一割引）

◎特別廣告料一行五號活字二十三字詰　金十錢

◎通常廣告料同上　金六錢

東京下谷區北稻荷町四十三番地　女新聞社

●明治女學校教科用書●

中村正直先生序　中根淑先生跋

漢文抄讀

中村正直先生閲　木村熊二君編

巻壹一冊出版　●郵送料八錢　●定價金卅錢　●巻二巻三近刻

泰西ノ文學我邦ニ行ル、ニ及ンテ又漢文ノ美ヲ說ク者ナシト雖本邦ノ言語文章其ノ從來スル處漢土ノ文章ニヨラサルモノナシ故ニ邦人ノ文學ニ志ス者其ノ楷梯タル漢文ヲ捨テ可ナランヤ玆書概子敬宇中村先生ノ采擇スル所ニシテ華ヲ摘ミ實ヲ採リ學生諸君ヲシテ時ヲ費スヿ少フシテ効ヲ得ルヿノ多キヲ欲スルモノナリ江湖敎育家諸賢幸ニ愛覽シ給ヘカシ

發兌　東京日本橋區通二丁目十三番地　小林新兵衛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

女學雜誌社出版書目

船越鼎太郎君著
産婦小兒攝生法　一册十八錢　郵税四錢

田口卯吉君結髪沿革附録○和崎義路君校○巖本善治君跋
渡邊鼎君著
束髪案内　美製小本八十頁細圖入　定價十五錢　郵税四錢

鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記
つれゞ艸講義　定價十二錢　郵税四錢

鈴木弘恭大人著述○小中村淸矩大人評
改正増補文法口授　一名和文獨案内　定價十八錢　郵税四錢

統計局次長世良太一君序○統計協會員呉文聽君序
朝野新聞記者横山雅男君著
婚姻論　定價三十五錢　郵税十四錢

巖本善治編
木村鐙子小傳　定價十錢　郵税六錢

中島湘烟女史著
善惡の岐　定價五十錢郵税十四錢

心の寫眞　一名嗜好及性質の記録　定價廿五錢　郵税八錢

通信女學講義録　每月刊行十五日發兌　一册定價廿錢全國無郵税

發賣所　女學雜誌社
東京々橋區日吉町八番地

發兌	定價	廣告
四月。七日　十四日　廿一日　廿八日 五月。五日　十二日　十九日　廿六日 六月。二日　九日　十六日　廿三日　三十日 七月。七日　十四日　廿一日　廿八日	一册。五錢　郵税。一錢（但府内無郵税） 十册。四十八錢郵税。十錢（同前） 半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢 一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢	特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む 一行一回（廿七字詰）前金拾錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

明治廿一年五月廿九日
自第百十二號
至第百廿一號　拾册　版權登録

明治二十一年五月三十一日印刷
明治二十一年六月　二日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY